

## 戦後思想再考

——〈論壇〉と対抗的公共圏：三島由紀夫と大江健三郎・吉本隆明と鶴見俊輔

### 報告1：三島由紀夫と大江健三郎

三島憲一

三島由紀夫には男女の機微を華麗に描く通俗小説的側面、美と崩壊をこれまた華麗に描くヨーロッパ・デカダンスの伝統の遅れてきた継承者の側面、日本美や武士道や天皇制国家への帰依を華麗に描く側面、それらと男性同性愛や政治テロとの結びつきを決断的な無理によって描く側面と少なくとも四つの側面がある。通俗小説、デカダンス、不可視の天皇と日本、ホモ・セクシュアルのテロ、これらを一環して貫いているのは、日常性への、特に戦後の日常性への激しい嫌悪であり、そこからの、世紀末文学以来の性と美とテロによる脱出という絶対に満たされることのない、あるいは死によってしか満たされることのない文字どおりの欲望である。

「彼は、それまで死を意志するあまり、熱狂的に仮面を意志したのだ。・・・美しい者になろうという男の意志は、同じことをねがう女の意志とはちがって、必ず「死への意志」なのだ。」

(『鏡子の家』)

それに対して大江健三郎は、ニーチェや三島由紀夫が語った意味での、いわばメタフォリックな政治、政治の枠組みを否定する政治をめざすのではなく、通常の、つまり新聞の政治欄という意味での政治の枠内での路線選択に強烈な意識を抱き続けた。部分的には朝鮮戦争も背景のテーマになっている『われらの時代』や『セブンティーン』『政治少年死す』そして『ヒロシマ・ノート』など1960年を挟む時期の作品群から、最近の言説にいたるまで、一環して戦後日本の政治が主題化されている。戦後日本の保守政治の欺瞞、特にアメリカとの癒着への批判的距離(三島と共有)、弱者のパーспекティヴの方法的継承、公共圏での平和と民主主義への参画は、明白である。また同じ西欧志向でも、三島由紀夫のような、市民社会の主流文化の周辺、つまり、爛熟やデカダンへの偏愛ではなく、つまり文化批判ではなく、どこに実現しているのかはわからないが漠然と思いだまれた西欧民主主義なるものへの思い入れ、美的抵抗ではなく、普遍主義的価値に依拠した政治批判が特徴である。とはいえ、大江にも戦後の退屈な日常を性と政治によって

脱出するというモチーフは変わらない。ときにはホモセクシュアリティへの嗜好も強い。

政治的な方向が反対であることにとらわれて、実は政治的緊張の磁場が、政治的緊張に対峙する思考パターンが相似していることを見逃してはならない。もちろん、先ほど述べたように、三島は美と民主主義政治を対立項として見ている。美に政治を吸収しようとして、死を主題化していた。美と死の結合は『憂国』のみならず、初期から最晩年の『豊穡の海』まで顕著である。大江は、個人的性とデモクラシーを対立とせず融合させようとして、実現できず普通の人になった。しかし、戦後政治からの脱出願望と結びついたテロの発想には共通したものがある。特にオナニストからテロリストへの変身を主題化した小説『セブンティーン』の分析によってその問題を論じた。また同時に、「市民社会の早熟の第四世代」（ソレル）であるヨーロッパ・デカダンス文学に浸った近代日本エリートの末裔たちが、モダニズムを放棄して日本の伝統なるものに走った（受験に必ず出るという点でメンテリティ形成に一助を果たした小林秀雄も同じである）戦後思想史の重要な一章は、今でも「新しい歴史教科書を作る会」のメンバーなどにその影響が強く、今後ともその理由に関しても細密に分析する必要のあることが論じられた。

報告2：吉本隆明と鶴見俊輔

川本隆史

戦後「論壇」の動向を三島由紀夫 vs 大江健三郎という対抗軸でもって捉え返す三島報告に続いて、『思想の科学』（1946～96年／通巻536号）および『試行』（1961～97年／全74号）という二つの雑誌がどのような《対抗公共圏》を形成・維持しえたのか（もしくは「しえなかったのか」）を解明していきたい、との予告を『大会報告集』に載せておいた。ところが戦後70年を迎えたこの年、「戦後」そのものを終わらせようとする企みとそれへの多種多様な《抵抗》がせめぎ合うさ中であって、「思想の科学研究会」を牽引してきた鶴見俊輔の訃報が届けられたのである。

そこで急きょ当初の構想を変更し、『現代思想』2015年10月臨時増刊号（総特集＊鶴見俊輔）に寄せた小文「ヤクザな師との「すれちがい」の記もしくは出しそびれた質問状」のコピーおよび『試行』と『思想の科学』を学びほぐす（Unlearning）——ひとりの読者の私的メモ」と題するレジュメ（A4判4枚）を配布して報告するかたちに切り換えた。そもそも“unlearn”という動詞に「学んだ知識を、いったんその厳密性から解き放ち、日常で使える知恵に変える」という意味をこめて「学びほぐす」と訳し直したのが、鶴見俊輔その人なのであった（『教育再定義への

試み』岩波現代文庫 2010 年、ほか)。

大学入学直後に読んだ吉本隆明の「マチウ書試論」(1954 年)から圧倒的な衝撃を受けた私は、『試行』の直接購読者に加わり、1970 年代は吉本の追っかけ読者だったことを白状しておこう。彼の思想の影響圏から離脱するきっかけのひとつは、『「反核」異論』(1982 年)に対する違和感であったし、「福島第一原発事故」をめぐる最晩年の発言には絶句せざるをえなかった。「知的上昇は自然過程であるため、「大衆の原像」を意識的に繰り返すところにしか思想の「自立」はない」とする言い分には今なお一定の共鳴を覚えるものの、原発事故後の新聞インタビューにおいて「発達してしまった科学を、後戻りさせるという選択はあり得ない。それは、人類をやめろ、というのと同じです」(日本経済新聞 2011 年 8 月 5 日朝刊)と放言した吉本の姿勢は受け入れることができない。彼の科学至上主義を unlearn するには、当人が戦後初期に書き残した一節を引くに如くは無い。

「原子力の応用といふ問題が呈示する重要さは、実は科学的意味のうちにはなくて、むしろ倫理的意味のうちにあるといふことを徹底して考へるのは良いことだ。……高度の器械が与へる僕達の実生活の簡便化といふことも、人間の進歩と考へるより、むしろ僕らが着々と自らの智力の復讐を受けつつあると考へる方が正しいのだ。……僕達の人間性が実生活の簡便化の極北で科学とぎりぎりの対決をしなければならぬ時がきつとやつて来るだらうし、それは人間存在の根本に繋がる深い問題を僕らに提示してやまないだらう。」(「詩と科学との問題」1949 年／『「反原発」異論』論創社 2015 年、147-148 頁)

鶴見思想の「まなびほぐし」をめぐることは、上記の小論で示唆しておいた。ここでは、[1] デビュー作『哲学の反省』(1946 年)が哲学を再生させる「三条の道」のひとつに打ち出した「社会生活の指導原理探求」というプログラムが、「民主主義科学者協会」やマルクス主義の革命原理に対する「気がね」(宮城音弥の弁)ゆえに放棄されてしまったこと、[2] 物議をかもした「アジア女性基金」への積極的関与については、プラグマティズムの本領であるはずの「マチガイ主義」を徹底させることなく「ヤクザの仁義」へと退行していること、以上の二点を再度指摘することとどめておく。なお『思想の科学』が標榜した「科学性」の評価に関しては、これを「近代科学」の実証主義や「科学的社会主義」の歴史法則主義へと縮減するのではなく、「エセ科学」の自覚をも合わせ持った *scientia* の本道へと再接続する可能性を探りたい。西洋の中世思想に関する深い学

識を有していた上田辰之助がこの誌名を提案した際にこめた意図を汲み取りつつ、狭隘な「科学性」を *scientia* へと拡充していくならば、戦後思想における「科学」と「倫理」の切断をも克服する展望が開けていけるのではあるまいか。私はそう見通している。

#### コメント

中野敏男

二つの報告を受け、中野会員からは主に三島報告に対してつぎのようなコメントがあった。

三島報告において指摘された、三島由紀夫と大江健三郎の初期作品における表現の近接性とその後のズレという問題は、この二人のその後の軌跡があまりにも対照的なためにかく見落とされがちであるが、「戦後思想」の意味を考える上でとても重要な問題が含まれているとあらためて気づかされた。戦後に彼らが共通に抱いたと思われる「死に遅れてしまった」という感覚であるが、それは戦時に彼らが目の当たりにしたと感じたはずの「純粹に生きている」という感覚、それゆえ「純粹に死にうる」という感覚の裏側にあるのではないだろうか。そうだとすれば、それは、敗戦直後の坂口安吾が言った「戦後に墮落する」という感覚、あるいは「戦後が墮落である」という感覚と重なっていて、決して彼らにだけ特異なことではないと考えねばならない。すると「戦後」に真に進むためにはその清算が問われることになり、それは思想的に見てもやはり困難な課題であつたに違いない。三島と大江の分裂が、その困難に対する二つの対処のあり方と考えることができるなら、それらの意味にも新たな光が当てられるかもしれない。

#### 質疑応答

中野会員からの、文学が大仕掛けのない批判的なものとなっている、という三島会員の指摘に対してそれが良いことであるということなのか、むしろ主体・自立への意志こそが戦後思想を形成してきたのではないか、という問いに対して、三島会員より、大仕掛け文学が後退しているというのは、自分の評価ではなく現実であるが、自分としてもそれをポジティブに評価している、との返答があった。

時安邦治会員より中野発言に対して、おおきなものを人びとが求めてるということなのか、だがその一方で醒めた日常生活がある、両者間のこの落差は最近のことか、それとも戦後一貫しているのか、という質問に対して、中野会員から、戦後一貫してあつたらうとの答えがあった。

速水淑子会員より三島発言に対して、おおきな物語崩壊の経験をした三島由起夫、大江が大仕

掛けの文学へ向かっているとの指摘のうえで、ふたりは形而上学的物語を求めたもののそこに矛盾がありそれが失敗したことが重要なのではないか、プラグマティズムよりそちらの方が有効ではないか、との意見が表明されたのに対して、三島会員から、ふたりにあって政治とテロの融合がうまくいっていないのはそのような時代は終わったからだ、そこから学べるのは確かではあるものの、新しい国家主義も緩やかな現代社会のなかで見るべき、つまり、かつての国家主義の再現という捉えからでは不十分であろうとの返答があった。

小野寺研太会員からは、中野会員の言うとおりの価値の拠点が求められているのはたしかだが、ネット社会のなかで表面的になってしまいかねない、そうした際に科学と倫理の地続きについてどのような見通しがあるか対して質問がされた。川本会員からは、見通しがないからこうして議論している、少なくとも切断はしないという見通しではある、生活では両者をつなげざるをえない、との返答があった。また中野会員からは、マックス・ヴェーバーにおけるニーチェ的契機を重視し、ヴェーバーをニーチェに還元しかねない議論があるが、そうではなく究極の価値を選択したときの文化的意義を問うのがヴェーバーだった、との指摘があった。さらに三島会員からは鶴見にも正義を貴ぶ立場が一方にありながら、単なる日本教的なところもあるので、そうした点を限定的に批判してゆく必要があるとの発言があった。

大園誠会員からは、戦後思想はいまほとんど注目されていないにもかかわらず、それを再考する意義はどこにあるのか、との問いがあった。これに対して川本会員からは、作業を通して検証してゆく、意味があるのかないのかをはじめから問うのは不毛だ、また SEALDs のブックリストにも戦後思想は入っておりそこに希望を見る、思想の科学が対抗的公共圏として成立しえたのは、「記憶をもつ雑誌でありたい」という志向性ゆえであり、記憶を後代に残してゆきたい、との発言があった。中野会員からは、戦後思想には問題があると自分は考えている、戦中があつて戦後がある、という認識の枠組みそのものを解体したい、戦後思想は植民地主義を射程に入れられなかった、との発言がなされた。さらに三島会員からは、戦後思想がほとんど読まれていないのはたしかであり、それは当時からのものだった、学の分野と公共分野のフィードバックがなかった、との見解が表された。

(質疑応答文章責任：初見基)